に從はざる可からず。かく贖罪は其原理一致に在るを以て、二個の側面を有し、且つ一方向に偏するのみにては吾人決してこの大秘義に達するあと能はざるなり」。

此一致の二側面中、前に引照せるルーテルの主張せる側面の暗示する所の意義は多數人の甚だ歡迎せざる所なり。されど人と爲るてふあとは、既にキリストに於て、人の立てる現狀に或る關係を有するものあらざる可からず。人類は既に或る位地に立てり即ち罪惡と其刑罰とを聯結せる倫理的秩序に由りて有罪と宣告せられたる位地に在り。キリスト若し此点を明にせずして人と爲りたるあとあらば、彼は人類需要の要點を廻避せるものと謂はざる可からず。然れどもかゝる事ありしと思ふべき道理あることなし。彼は人を救ふを以て其任と爲し、且つ之が爲に救拯の必要を生ぜる狀態即ち宣告せられたる狀態に在りて人と爲れり。キリストは一言一行たり

とも此狀態を忘れ若くは輕視したることなし。否彼は之を認識して以て自己の狀態と爲せり。是れ實に自ら合体した人類の狀態あればなり。然る後彼は之に處する道を執りたるか其處置を爲すや高尚に莊重に且つ眞實にして、之を避け或は之を曲くるが如きあとなく、從容として唯其正しとする所のものを爲せり。而し其正しとする所を爲すや人間の狀態の受くべき分を己が身に引責せり吾人はかく言ふにして此に止まらざる可からず。

此處置は實際果して如何ある有樣に遂行せられしか、又彼に取りて實際如何ある意義を有せしや、此等は輕々に論述すべきに非らず神キリストを罰せり、若くは神キリストを怒れりと謂ふが如き言語は、元來甚だ不適當なる言語にして、殊に後者の如きはカルヴインも之を認めし如く在るまじきの事ありとす。然れども明白に此に主張せざるべからざるあと二あり。其一は即ち罪惡と其刑罰とを

聯結せる倫理的律法は決して之を破壞す可からず、否却て眞正適切に其効力を有せしめざる可からず。而して其遺憾なき適切なる發表は必すキリストの上に臨まざる可からず。而して此事の吾人の上に來り臨まず、且つ將來にも吾人の身に來り臨まざるあとは福音の本旨たりとするも。然も之が爲に倫理的律法は塗抹刪去せらる可きにあらず。否既に整正せられたるなり。若し讀者諸君にして何處に於て其整正せられたるやを問はゞ、余はキリスト人と爲れる時、人類の立てる狀態と其結果とを己れに引責し、且つ吾人に代りて悉く其結果を負へる事實に於て之を成したりと答へんと欲するなり。如何なる困難と難解の秘義ありと雖も、唯左の一事、神より出つる宥恕(赦)てふ宥恕の最眞最要の原理を維持す可きなり其の事實とは他にあらず、道德的宇宙の倫理的秩序は之が爲に決して曖昧に附せられざりしあと即ち是なり。又吾人に代りて此倫理的秩序に應答せんが爲に

「罪人の中に數へられたる」彼が、吾人と自己を合体せりてふことの眞實なるあとは、必ずや之を維持せざる可からものとす。縱令キリストは ―― 實に彼の吾人に對する凡の關係に於ても然るが如く ―― 吾人の說明以上にありて、其企圖する所も亦說明以上にありとも。

以上は宥恕の原理たるキリストと吾人との一致の一側面なり。されど是れ只其一側面たるのみ。素より根本的のものあれども稍然れども未だ盡さゞる所あり。是れ唯贖罪の一半にして他の一半も亦切要なることは之より進んで明にせんとす。縱令キリストが彼自身を以て罪惡と其刑罰とを聯結する倫理的秩序に應答せりとの事實を許容するとも、畢竟するに其我に影響する所果して幾何ぞや。我はキリストにあらず。彼は素より倫理的秩序に應答したるなるべし。されどキリストの應答は未だ余の應答に非らず。我若しキリストありしあらば

其應答は素より既に充分なりしなるべし、されど我はキリストにあらず。我は今猶ほ罪人にして應答せざる可からざるものなり。此に於て乎、基督教の原理――キリストと人類との一致――は再び吾人に近接し來り、而して其充分なる適用を以て宥恕の福音を完結せしむべきなり。

請ふ再び基督教の原理の主張する所を聞け。夫れ義あるキリストは既に罪惡と其刑罪とを聯結する倫理的秩序の要求を充たし、而して今や彼は諸君の眞我たらんことを要求せんとす。既に神の律法に對する人類の一般の關係に從つて、彼自身を人類と合体したりしが、彼は今又彼等と個人的一致を結ばんことを人々に――各人の情緒と意志とに――要求するなり。是れ即ち宥恕の福音はキリスト罪の爲に死せりと謂ふが如き單なる事實若くは教理を信ずるに非らずして、死して罪に代りて應答せる人格を受け入れ、且

つ智と情と意とに於て彼と一体となるべく、吾人に對つて要求する所のものあり。果して然らば若し諸君にして眞に靈的意義に於て彼即ちキリストたることを得ば、彼の應答は亦眞に靈的意義に於て諸君の應答たる可し。「是故にイエスキリストに在るものは罪せらるゝ事なし」かくて彼等は罪惡と其刑罪とを聯結せる律法に對して始めて完全なる應答を爲すあり。如何となれば彼等は既に應答者と內部的實際に於て一体なればなり。

此の如く吾人とキリストとの一致――智情意と生命とに於ける內部的一致――は、彼が吾人の狀態と己れ自身とを合体して以て處置したりし所のものを完成するあり。其結果として宥恕の福音は生する也、此の福音の如何に倫理的なるかを注意せよ。彼の吾人は單にキリストの事業より生したる變化を信ずるのみにて足れりと爲すが如き、虛妄なる宥恕の福音は、必然に正當なる倫理的の內容をば含

有にすること能はずとの批難を免れ難し。然り而して屢福音的新教主義に於ては、此の罪の宥恕を以て基督教道德と別箇ものとなし、二者相關せざるせのゝ如くに――道德は寧ろ宥恕に對する感謝の實として一般に生じ來るべきものなりとして――主張するなり。此の如きは、醇正の方法を誤れる甚だ欠點ある論述と謂はざる可からず。其眞正なる論述は當さに左の如くあるべし、曰く「罪の赦は單にキリストあるが爲に與へらるゝにあらず、亦キリストの內に在りて與へらるゝものなり」と。福音中單なる宥恕あることなし。福音中亦キリストと關係無き宥恕なるものならず。諸君は宥恕者なく、又心意と生命との內部的一致に彼を請諾することなくして決して宥恕を得ることを能はず。唯此の如く彼を請諾する時初めて彼の應答は諸君の應答とある可きのみ。然れども道德的生活の全部分中に彼を請諾するにあらずんば、諸君は決して自己の心意と生命とに彼を請諾するあ

とを得ざる也。されば道德は單に宥恕の附屬物にはあらず。道德はキリストの至上命令にして、亦キリストの爭ひ難き部面なり。而して罪恕はキリストの分離し難き部面に屬するものなり。

諸君はキリストの事實の最初の意義を有せずんば――諸君に對して彼の新生活たるを發見することなくんば――亦吾人が稱して以てキリストの事實の最後の意義と爲す所のものを有すること能はざるべし。キリストは決して分離せらる可きものにあらざる也。既に畧論述し盡したれども、猶二三の言ふ可きものあり。余は屢宥恕あるものは、吾人の面前に在る道德的理想と分離す可からざるものなるあとゝ、律法の要求に應答する偉大なる應答者と內部的一致を爲して彼の應答始めて吾人の應答と爲るべきものなるあとゝを極言したり。然れども道德的理想を實現するあと心意、生命を以てキリストに一致するあとは、纔に其端緒たるに過ぎず。斯く言へば人の宥恕は唯

萌芽期にして、未だ確實なる成效にあらず、隨て不定の狀態に在るが如く思はる可しと雖も、此は決して福音の主旨にあらず。吾人眞に誠實なる心意を以てキリストと合体せば、縱令實際に於ては不完全なるものある者も、律法に對する彼の應答は吾人の應答にして最早終了完結したるものなり。吾人はキリストとの一致點に於て吾人立脚の地を發見し、かくて律法の詛よりを救はるゝを得るあり。且つ眞正なる福音的基督敎に於ける靈魂不滅の意義も亦此點より起り來るあり。啻他日恕さるべしてふ朦朧たる希望の曉色にあらずして、堅固確實なる信念たるなり。吾人はキリストとの一致に於て神聖なる生活を始め、且つ之に對つて進み行くべき招聘の聲を聞くあり。されど基督信者にして、主なるキリストが彼等の爲に戰ひ給ひしより、爾來絕えざる靈の爭鬪中に奮進して、其救拯より得たる感動を以て戰ふに至らば、前には萌芽の如きものゝ實際偉大なるものたるあ

とを知るに至る可きなり。

是れまで論し來れる所、固より碎片に過ぎずと雖も、イエス、キリストに由れる贖罪の原理の論述は、此に終結を告げざる可からず。如何に精細なる論述も到底此等の條項を論じ盡すあと能はず、又之に關する總ての難問に答へ得るものはあらざるべし。元來此等の事は全く比類なき事項にして、尋常一樣の原則の下に一括すること能はざるを記憶せざる可からず。此等は元來其元始の狀態の獨一なるが爲に比類なきものなり。夫れ、キリストと其人民との一致て云ふことは人類の經驗に於て其類を見ざる所にして、友情若くは人類の一致結合、其他如何なる範疇の內にも括約するあと能はざるものなり。吾人キリストに關しては他の人物に關して語るが如く語ること能はず。キリストは吾人に取りて實に古代の師父が「吾人の分離すべからざる生命」と謂ひしものなり。他の敎師若くは嚮導者に關しては、吾人決

して彼の大なる聖徒にして又學者たるトーマスアキナスがキリストと基督信者との關係を說きし如く、神秘ある一個の準人格ありしと言ふこと能はず。全問題の根本的原理は蓋し此に存す。而して贖罪其物は既に全く獨一なるが故に普通に所謂最終說明は到底爲すこと能はざるあり。但た吾人にして此の獨一なる根本的原理を記憶するあとあらば、此問題に對して起り來る難問と駁論との多分は消失し去る可し。蓋し全体の思想に對する主なる駁論は、若し世に正理公道の存するあれば、誰も此の如く己れ他人の罪を負擔す可からずと言ふに在り。然れども此の「他人」及び「己れ」てふ語は果して此に應用せられ得べきものなるや。古き蘇國信仰問答に「キリストは彼の人民より分離せる他人に非す」と言へるが如く、此には眞に「他人」と稱すべきものあることなし。之を神秘的なりと謂はゝ言へ、余は他の語を以て神の人類に接し給ふ道を說明するあと能はざるあり。然れども此

の如き秘義は事實あり。此事實は能く贖罪に對する不虔不正の難詰に答辨するを得るなり。此等の難詰は屢聖書的ならざる不正確の想像を有する人々の所謂(エキスプラネーション)說明なるものより起り來るあと多し。蓋し贖罪の說明あるものはあらず。唯十字架は其解釋者たるのみ。果して然らば、キリストと基督信者との一致の獨一中心的の原理に從ひ吾人は、贖罪の贖罪たる實際は、神學者等の議論に於てよりも、神と心靈との交通の學校に在りて能く之を認め得べきあとを知るなり。聖パウロは彼の祈禱に於て最も深く之を實驗せり。人は神の別に自己の道德的破產を實認して之を告白する時、始めて柔和なる聖者が如何に彼を愛し、且つ彼の蒙れる宣告に於てすら己れを一体となして彼は代りて之に應答し給へるやを實驗して、贖罪の切要を感ずる愈益深きに至る可し。かゝる福音を恐弄するは、未た心の痛みを覺えることなき者の嘲笑に過ぎず。基督敎は罪人の唯一なる宗敎

あり、

第六章　基督信者とは何ぞや

吾人は今や研究の歩を止めて、旅行し來りし地より實際的結果を收拾すべきの位地に達せり。

吾人は最初基督教の根本的基本を索め、而して此基本は哲學的若くは倫理學的系統に在るにあらずして、イエス、キリト彼自身に在ることを發見せり。吾人は一歩を進めて、今日に於ける宗教は如何なる點まで、此基本の上に樹立し得るやを討究してキリストは啻に歴史上の事實たるのみならず、亦今日に於ける生活と經驗との事實即ち宗教の範圍内に在る事實たることを發見せり。故に吾人は又更に進んで、此事實は宗教に對して如何ある意義を有するやを研究したりしが、其意義は品性と良心とに對する最深最奥のものにして、新しき道徳的生命、即ち活ける神の眞の啓示、又保證せられたる宥恕の福音あ

ることを發見せり。此等は皆宗教其物にして、此宗教は亦基督教なり而して基督教は吾人之を定義して「キリストの事實の意義」と稱するより外、更に優れる定義を下すこと能はざるあり。蓋し此の事實中に基督教の基本ありてふことは、宗教は此等の基本の內容なり即ちキリストの意義なりてふ相關的の意義を有することに外ならざるあり。

然れども以上の討究を以て未だ重要なる研究を終れりとは謂ふ可からず。歸する所、吾人は基督教を理解するに止まらず、更に進んで基督信者たるを以て最も必要なりとす。光は則ち生命と爲らざる可からず博士チャルメルス――常に眞理の道德的意義に關する大教師たる――の言へる如く、基督教に關する吾人の第一務は「之に步を進むるにあり」吾人は既に基督教を論述せり。今や如何に之に處すべきかを熟考せざる可からず。吾人は既に基督教の何たるかを考究

したれば、今や基督信者の誰たるやを考究せざる可からず。

斯る疑問は簡單且つ明瞭に答ふるの必要あり。如何となれば基督信者と爲るは決して複雜なる理解し難き問題たる可からざれは也。然れども亦唯基督教の或點のみに止まらず、其全体に對する適切なる關係を以て之に答へざる可からざるなり。之につきても吾人は基督教の何たるにつきて既に學ひ得たる事を記憶するの必要あり。是れ即ちキリストの意義にして、基督信者とは自ら此意義に應答する所ある者を謂ふなり。余は更に此の「應答」(レスポンチング)でふ語を說明せざるべからず余は普通に用ひらるゝ「信仰」なる語よりも寧ろ此語を用ひんと欲す。是れ「信仰」てふ語は往々信條に關して用られ、且つキリストは智力に對して意義を有すれども、生活と品性とに對して左の其意義を有するものあればなり。今かゝる說明を離れてキリストの事實の意義に應答せんとせば、疑問は直に起り來るあり。或る人は謂らく、吾人が以上の

論述しつゝありし事はキストの事實の最も驚くべき意義にして、且つ其意義たるや、多數の人々には極めて智識上の難問に包まれたるものなるに、基督信者とは悉く此等の意義に對して應答するものならざる可らざるやと。然れども少しく反思せば此疑問は忽ち消失すべし。吾人は既にキストに於て宙に多數の人にのみならず、吾人の凡てに對して最も實際的の疑問を以て包まれたる、生活及ひ品性に關する意義を發見せざりしや。若し信仰に對するキストの智識的意義——例へば、彼は神人なりと宣言する——に應ふると或人に困難ならば、品性に對するキストの道德的意義——例へば生活に於ける愛と純潔を吾人を要求する——に應ふることも亦齊しく困難なるを免れず。果して然らば、吾人がキストに對する應答は一の理想たるに止まるなり。完全なる基督信者はキストの事實に就て其思想と生活との全意義に應ふることを得へし。然れとも此の如き完全

なる基督信者何處に在るや。聖パウロも自ら盡く知り得たりとなさず。ルーテルも自ら「總にして基督信者なり」と稱せり。されど應答は完全ならざるも、眞實なることを得べし。而して吾人は、キストに對する道德的應答と智識的應答とを別箇の主義に照らして論じ、且つ基督信者と稱せらるゝ者は或る程度まで、殊に智識的應答の或る程度まで達せざるべからずと限るが如き、全く不穩當なる傾向に對して烈しく抵抗せざる可からず。世には生活に關するキストの意義に對する實際的應答の甚だ薄弱なるに拘はらず、之を基督信者と稱し、教義的信仰に關するキストの意義に對して其智識的應答稍穩當を欠けば、忽ち基督信者たるを許さざらんと欲するが如き人少からず。然れども此の如きは是れ決して維持すべきの見解には非らざる也。凡て基督信者に必要なるキストの意義に對する應答は、信條と實行とに於て齊しく之を決定せざるべからず。而して如何に之を決定す

べきや。曰く、人の知識的及び道德的性質と境遇との兩者は其間に截然區劃を立つること能はざるのみならず又同一の區劃を既に總ての人に適用すべからざる程に個人的にして且つ互に相異れり。されば道德上及び知識上各個人の責任は唯良心に於て、故に又眞心の鑑識者たる神の聖前に於て、之を決し得べきのみ。實に「主は己れにつけるものを知る」なり。

吾人は以上論述せし所に由りて基督信者の定義を下すことを得べし。余若し一語を以て基督信者の誰あるかを述ぶべしとの請求を受けば、大畧左の如く答へんと欲す。曰く基督信者とは神の聖靈に由りて自己の智識的及び道德的良心に提供せられたるキリストの意義の何れにか應答する者なりと。此の定義は深遠なる基督敎に對しても能く其意義を盡し、且つ單純なる基督敎に對しても亦能く適當するを得べし。其思想に對すると生活に關するとを問はず、キリストの意

義は、之に應答するに、或人は智識上の許諾を以てするも、或は亦實際上の服從を以てするも、共に多樣にして又進步せる意義たるを得べし。又或る他の人は、自己の性質、敎育及び境遇等の異なるに關せず、一樣の熱心と奮勵を以て其の最も單純なる意義に應答するおとを得べし。苟くも忠誠なる良心に由りて應答せば、齊しく是れ基督信者たるなり。然れども誤解するなと勿れ。余は決してキリストの事實中自己の好む所の意義にのみ應答するを得べしと謂ふものに非らず唯神の聖靈の良心に印したる所に從ひ、敢て自己の意向を以て之を取捨するにはあらざるなり。又余はキリストに幾何の意義を有せしむるとも、敢て深く意とするに足らずと謂ふものに非らず。否其の關する所は頗る大なるものあるを信ず。基督信者にして基督敎的信仰富贍ならず、基督敎的生活の勝利を味ふこと多からざれば、是れ大なる損失者なり。然れども未だ「失はれたる者」にはあらざるなり。宜しく

彼を奬勵すべし、之を教會外に放逐す可からず。夫れキリストの第一に着眼し給ふものは、吾人の信仰及び行爲の完成如何にあらずして、意向の誠否如何に在り。彼の詰責し給ふ所は彼に從ふに當りて失敗多きにはあらずして、其不忠實なるに在り。蓋し行爲よりも意志を重ずるゐとキリストに勝れる教師は他に在らざる可し。

然れども吾人は特に今少しく之を敷演せざるべからず。余はキリストの意義に對する「應答」なるものに關して是迄論述し來れり。されど此語は更に又其説明を要するあり。蓋しキリストの意義に應答すとは、若し此意義にして眞實あらば、吾人之に對して、當に然かあるべき者となり又爲らざる可からざるの謂ひなり。今吾人をして既に辨論したるキリストの事實の意義——品性と信仰と真心とに對する意義——を回想し、而して後、吾人は當に如何ある氣風の人物とならざる可からざるやを自問せしめよ。如何なる愛と信頼と感謝と服從と

奉事とが吾人の生存に反響し、且つ之を規正すべきや。此は空漠なる事にもあらず。亦實際生活を離れたるものにもあらず、是れ即ち生活なるなり。蓋し諸君の存在は諸君の生活なり。諸君が日常生活に於て遭遇する景色と境涯と家具との如き、皆諸君の存在の一部分にして、生活の凡の事情、興味、關係等は諸君をして諸君たらしめ、諸君の存在に貢献せざるものあることなし。されば諸君は凡て此等に於てキリストに應答ずべきあり。即ちキリストの事實が、生活の此等の事實に對して如何なる意義と方針とを指示すやを發見し、又此意義と方針とに忠實あらんには——要言すれば、即ち基督信者たらんには、更に博士チャルマルスの語を用ふれば、基督教に「歩を進め」んには——日々内外に於ける經驗の種々相異れる境遇に在りて、二個の大なる事實、即ちキリストの事實と生活の事實とを互に相接近せしめ、且つ誠實に其關係を保たしむるに在るなり。果して此の如くなれば、此二

個の事實は驚くべき程互に相解釋し、相說明す可きなり。此の如く考へ來れば、基督敎は單に生活の一部分即ち「靈魂上の事項」たるに止まらずして生活の全体に關するものなり。如何なる生活も――余はルーテルが何處にてか斯く言へるおとありと思ふ――基督信者の生活ほど斯世的なるものはあらず、基督敎の生活は總て吾人をして吾人たらしむるもの、即ち思想見識の依て顯はれ來る所の凡ての生活を包含す。敎會的基督敎の陷りし大なる過失の一は、斯世の生活を輕蔑拒絕して、修道院内の生活を以て家族、市場、其他斯世の競爭場裡に於ける生活よりも高尙神聖なりてふ印象を與へ、聖徒の模型は後者よりも寧ろ之を前者に求むべしと吾人に命ぜしに在りき。余はキリストの事實中一も此の如き意義を發見すること能はず、人の中に飲み食ひせし此のナザレの木匠は、吾人の尊敬すべき唯一の聖徒なり。吾人は宜しく俗生活を聖別して以て聖徒的品性を斯

世に移さゝる可からず。古代の一師父は曰く「汝が今肉に從つて爲す所も皆靈的なり、是れ汝がキリスト、イエスに由て凡の事を爲すが故なり」と、凡の物は彼に由りて造られしが故に、基督信者たるものはキリスト、イエスに由りて罪惡を除くの外凡の事を爲し得るなり。

(附註)――此くの如く言ふと雖も、吾人は亦基督敎歷史の或時代の間隱遁的思想の價値及び其必要をも承認せざる可からず。或る人(即ち敬虔にして頴敏なるニューマンを喪ひし以後、英國敎會が有せし最も雄麗なる心)に由りて謂はれし如く、「是れ實に當時の世に在りて深き印象を與へたる唯一の大戰爭とし見るべきものなり」(ヂーン、チャルチ著「隨時隨錄」)。蓋し基督敎道德が自己の生存の爲に、時代の亂暴粗野なる陋習と戰へる時には、亦之に對する同一の激烈を以て戰ひたるなり。

吾人が罪惡を除くの外と云しあの除外は甚だ必要なり他のキリストの事實は之を承認することに困難にして且つ議論ありと雖も彼と同一体たるべき招聘と勸誘とは罪惡との戰爭に外ならざることは甚だ明瞭にして且つ其主要件なりと謂ふべし。吾人は罪惡なるゝの〻其全体の目的、主義、活動に於てキリストと兩立す可からざるものなることは、殆ど動かす可からざる原則なることを知るあり。されば吾人は斷乎たる決心を以てするに非らざれば、此の複雜なる俗生活を生活すること能はざる可し。而して猶ほ前に宗教的生活の廣く且つ斯世的なるに就て言へる所の意義を增補し、又或る意義に於ては之に反對して、此問題に他の側面あるを承認し、單純に然かも眞實に左の二個の要件を守るに非らずんば、未だ罪を逃れ若くは罪に勝つあとを爲し得ざる可し。

其の一は祈禱なり。吾人の基督教は斷へず單なる一個の系統――吾

人が多少忠實に固執する所の教理若くは先例――に變化せんとするの危險あり。若し基督教にして一個の系統に過きずんば、生活に於て遭遇する間斷なき狡猾なる罪の誘惑中に在りて吾人を全勝の地に導くこと能はざる可し。此等系統の背後には必ず個人的なるものなかるべからず。吾人は神が眞正に近く在まして、大なる權威と深き恩惠とを以て、甚だ驚くべく吾人の上に臨み給ふあとを實驗せざる可からず。吾人の宗教は當に研究に資する教理若くは實行せざるべからざる義務のみならず、亦招聘、感激、交通ならざる可からず。故に又傾聽する良心、驚嘆せる心靈、肅然たる靈魂、深愛ありて懊惱する心情の宗教たるべし。罪惡の勢力是の如くして漸く消失し去るなり。而してかゝる「神と靈魂との相互の談話」は、最も簡單にして然かも一日も廢すべからざる祈禱に於て、眞正確實に表明せずんばあらず。之に依りて――其他殆ど何物にも依るあと能はざるが如く――「吾人は神

の面前に出て、神は如何なる神たるか又吾人に對して如何の神たるかを確認するあり。祈禱以外に罪惡に克つべき物あることなし。罪惡を制する祈禱の力は云ふを須ひず。諸君の生活中常に脱し難き一個の罪惡を擧げよ。之に對して祈れ。其結果は果して如何。諸君は必ず自己の罪惡と相伴ふて生活すること能はざるを發見すべし。諸君の祈禱は諸君の罪を殺し、然らざれば諸君の罪は諸君の祈禱を殺すべし。故に生活に於ける此罪惡に關して如何に處しつてあるや否やを驗せんと欲せば、殊に私かなる生活に於て、罪と祈禱と二者孰れか生き殘るかを驗するより正確なる試驗法は他にあらざるべし。

吾人が恪守し且つ承認すべき他の一は鍛煉即ち克己是れなり。余は既に基督教的生活、即ちキリストに應答する生活の廣く且つ斯世的なるを主張せり。然れども人々は多の事に「否」と言はずしては、キリス

トの凡の意義に「然り」と言ひつゝ、此の富贍にして然かも吾人を俗了せんとする所の人生を生活するあと能はざる可し。且つ此の「否」てふ語は、明白に罪惡に向ふて發するのみあらず、亦確然罪惡と定め難きものに對しても時々之を發せざる可からず。其理由は他にあらず、吾人は元來不完全にして且つ頼み難き武器に依りて斯世に在りて吾人の基督教を作り出さゝる可からず。神學者は之を名づけて吾人の墮落性と云ふ。人性に名づくる如何なる名稱を以てするも、少くも人の性質は、キリストと相異れる生活の見解より云へば道德上正當と稱すべき事柄に依てすら容易に誘惑し去らるゝあとあるは實際上の事實なり。此實際上の事實を拒む人は、偏頗にあらざれば則ち不明と謂ふの外なし。蓋し斯世は人々が基督信者と爲るべきの場所なり。然れども彼等が容易に基督信者と爲るべき場所には非ず。斯世には其の宗教的機會あり。然れども此機會は亦危險と相伴へり。此危險あり

とても人生より遁竄するの理由とはならざるなり。義務の途上に於て吾人が逢着すべき危險の存する所以は、之に打ち勝ちて以て益高尚に進むべき爲めならずんばあらず。吾人が鍛煉と克己とを要するの理由爰にあり。若しキリストに對する誠實にして遺憾なき應答を危險に陷らしめんとし、若くは之を害ふものある時は、吾人斷乎として之を「斷ちて棄て」ざる可からず。一事一物に於て抑制を加ふべく又殊に實際の生活の全般につき再考再思して其の價値を定め、其排列を新にせざる可からず。吾人の中或る者は、自己の爲め若くは隣人の爲めに、特に他の人よりも多くかく爲さゞる可からざることあるべし。又或る者はキリストが明かに言ひ給へるが如く、其の右の手を斷ち、其右の眼を抉出して之を棄てざる可からざることあるべし。されど此は中世紀の教會が敎へし如く、一層高尚にして、一層聖徒的理想に適へりとは謂ふ可からず。此はキリストの言の如く

「殘缺にて天國に入る」ものなり。然れども此の複雜にして曖昧模稜なる人生に於て、誠實に且つ遺憾なくキリストに應答せんと欲するものは、如何にしてか――然かも最も眞正なる方法は、人の面前には克己の如く見ゆるものにあらず――克己の途を歩まざるべからず。人生を愛せざるには非らざるも更に多くキリストを愛する坦懷濃情なる人の、宗教的臭味を脱したる術はざる克己鍛煉は、特に高貴の慕ふ可きものありて在するあり。吾人はキリストの爲に喜んで己に克つべし。彼は他日必ず之に酬ひ給ふなり。左の詩句の意實に是にあり。

我が爲に谷間に伏屋を造れ、
其處にて歎き祈らん爲めに。
されど我が宮殿の塔をば毀ちそ、
妙に美はしく建ち居るものを。

何れの日か我身の罪を滅して、
また諸人とに倶歸り來たらん。テニソン

此詩句の末二行は人生に於けるキリストの意義の他の側面を暗示す。余は一言を之に加へんと欲す。抑も此詩句は宏大なる來世を暗示するものにあらざるなき乎。余は前に、斯世の生活は基督信者と爲るべき眞實の境界なりと雖も、キリストに對する應答は甚だ不完全にして危險に陷り易く、唯戰爭に由り、又祈禱と克己とに由りて、纔かに之を維持し得べきなどを言へり。然り而して生活の終りには死の事實あり。此事實は大なる事實にして、眞正完全なる人生觀は必す死の事實に就て何事をか敎ふる所なかるべからず。然り「キリストの事實は實に之を敎ふ。夫れキリストの終局の意義は來世的意義なり彼は嘗に歷史上に「在し」て又經驗內に「在す」のみならず、亦將來に於て「來り」給ふべきなり。此事に就ては今日吾人の知る所甚だ僅少なり。さ

れど、斯世に於ける品性と信仰と良心とに關するキリストの意義若し僞なき約束たらば、來り給ふべきキリストの意義は、現生活に於けるものよりは「更に愈れる」ものならざるべからず。果してキリストの意義にして、常に妨害と脅迫とを受くる不完全なる善より進んで勝利を得たる、安全にして豐富なる善、然かも一層眞正なる個人的にして新鮮活潑なる善に吾人を導くものとせば、實に其愈れるを知るべきなり。故に聖パウロは「わが生けるはキリストの爲め」と曰ひし後「死も亦我が益なり」と言へり。

此の如き論述は一見不自然にして附會せるが如しと雖も、余は思ふ基督敎の神意より出てたる宗敎なるなどを確信せしむる者は此敎が現世にも來世にも最も適當せる一事に如くものあらずと。是れ即ち基督敎其自身が世人の必ず需むべき宗敎なるなどを標榜する所以なり。元來キリストの世に在し給ふは、最も眞實にして且つ斯世的

の意義に於ける生活の爲めなり。而して吾人も亦最も眞實にして且つ斯世的の意義に於て斯世に生活せんとす。斯世の生活は甚た美はしくて、最も强く吾人の心を動かし、且つ吾人を招くものあり。然れども吾人益深く、益豊かに此招きに答ふるに從つて、其招き單に斯世のみあらざるおとを悟らざる乎。人生は豊富にして又眞に善美なるものあり。然れども其甚た善美なるものゝ中に――眞理と愛と品性と服事との中に――之よりも更に一層善美なるものゝ微妙なる暗示なくばあらず。或人の傳記中に曰く「余は人生の愛すべく、麗はしく、光輝あるおとを發見せり。余は眷々の情を以て生活を再ひせんおとを冀ふ」と。此の願望は實に斯世の經驗に伴へる眞實にして且つ最も深き追加にはあらざる乎。是れ人生の中愛すべく、麗はしく、光輝あるものゝ最も眞實に且つ最も深きものにして、亦更に一層愛すべく、更に一層麗はしく、更に一層光輝ある或るものゝ告知、瞥見、前表にはあらざる乎。是

れ實に吾人の行爲に最も優美なる彩色を與へ、吾人の愛情に純潔なる熱切を加へ、天地自然に對してすら、吾人をして左の如く言はしむ

如き深邃ある意義を與ふるものにはあらざる乎。

咲出づる世の常の花さへも
感激の涙も更に及びあき、
深く潛める思想をは
折りにふれては語るなり。

夫れ無限の海は斷へず吾人の生活する有限の岸を拍てり。吾人斯世に在りて滿足を求めて嘆くとき、斯世にての滿足は唯自殺の一種なりとは思はざるなり。吾人の造られたるは斯世の生活の爲めなり。然れども亦斯世のみにはあらず、斯世を終りて「更に愈れる」生活をおさんが爲めなり。基督教の吾人に教ゆる所も亦此なり。斯世の生活の鍛煉に於て、此の如く吾人に適したる意義を敎へたるキリストは、鍛煉

の終期漸く近て、靜かに來世を眺むる時に於ても、亦齊しく吾人の性質に適したる意義を表示し給ふべきあり。かくて基督信者たるものは皆其生涯の日毎に神を祝し、又人生の最大時たる死の日に於ても猶ほ能く神を祝して、恐るゝあとおく、歎くことおく、盡き果てざるキリストの事實中吾人の未た知らざる所の意義に進み入るなり。

余は將に此講演を終らんとす。されど猶ほ殘れる幾多の疑問中より一の疑問を掲示して、少く之を說明せざる可からず。吾人は是迄基督信者とは何ぞやてふことに就て語りつゝありき。されど吾人は今何故基督信者と爲らざるべからざるやに就き、暫く此に之を論ぜんと欲する也。

此に二つの聲あり。共に眞面目にして誠實なる思想を有する人々の心中に於て、永く其沈默を破らずしては止まざるなり。其の一は即ち彼自身の事を人に告ぐる所の內部の聲なり。此聲は吾人の容易く

自己の責任を忘れ、甚しきは自己の道德的統一を擾り易き所の世の喧囂に對し、戸を鎖して吾人自身の個人性と運命とともに直接に協議する所の聲なり。其聲甚小さくして他人に聞へず、又己れ自ら之を消し去り易し。然れども、生活の閑寂なる處に於ては——殊に大なる沈默の吾人の心靈を靜止するとあらば——其聲甚だ明瞭にして覺へず耳を傾けしむるものあり。第二の聲は前者の如き小さき聲にはあらず。是れ勞苦と悲哀とに充てる人生の限なき呻吟にして、或る時は碎くる海波の定めなき怒號の如く、或る時は行く方知らぬ悲風の音に似たり。此の聲も亦人の耳を鈍らし、人の心を死せしむる私利心の爲に又時としては宗敎的私利心の爲めに消し去られ得べし。然れども亦屢人の心を動かして、唯自己の爲にのみ生活するよりも、更に價値ある生活に就て思ひ起さしむるなり。此の二つの聲は常に人々の心情に訴へつゝある所の大なる聲にして、共に是れイエス、キリストを仰

き、且つ彼に學ふべき招聘の聲にあらずして何ぞや。吾人若し正しき生活を爲して平和なる死を遂げんと欲せば、キリストは吾人自身の爲に必要欠く可からざるあり。吾人若し皮相を離れて眞實に人の爲に盡す所あらんと欲せば、他人の爲にもキリストは欠く可からざるものあるを知るべし吾人は同胞兄弟の愛に動かされて亦基督信者たるべきの任務あるあり。吾人にして唯少しく之を考ふるあらば、而して、吾人の生活とキリストの事實とに刻せられたる如くに之を讀み得たらんには、吾人は必ず愛の招きあることを知るべし。是れ神が諸君と余とに示し給へる無量にして價す可からざる恩惠と寵榮たるなり。

此等は凡て吾人が基督信者たるべき理にして、要するに左の如し。イエスは自ら「我は眞理あり」と謂へり。されば余は此講演に於ても教會若くは聖書の權威に依りて之を論せずして、專らキリスト自身を叙

述せんことを務めたり。是れ彼にして果して眞理たらは、彼は彼自身の權威あれはあり。彼は實に果して心意と情緒と良心とに對し深く且つ眞成に眞理ありと感すべき或意義を有せざるや。若し然らは基督信者たることは是れ眞正なる生活の第一義ありと謂ふ可きなり。

基督之事實

終

明治三十五年十二月十四日印刷
明治三十五年十二月十七日發行

定價卅錢

飜譯者　千磐武雄

發行者　東京市神田區猿樂町二十五番地　若林鑒太郎

印刷者　東京市神田區錦町二丁目三番地　池田良藏

印刷所　東京市神田區錦町二丁目三番地　知足堂

複製不許

發行所　東京市神田區猿樂町廿五番地　中庸堂書店

大賣捌所　東京市京橋區尾張町　警醒社書店

賣捌　大坂市東區心齋橋北久太郎町　福音社書店

東京教文館●聖公會出版社●田端商店●小杉書店●小島書店●東京堂●上田屋●有斐閣●文明堂●光融館●信州木島隨天舍●仙臺紀港堂●札幌富貴堂●紀州田邊自啓堂●其他各所

95
1

日本基督教青年會同盟出版物

一基督の事實 カーチギ、シンプソン氏著 千磐武雄氏譯 一部定價卅錢 郵稅四錢
Christians of Reality, six devotional addresses by Jhi R. Mott. 50 sen Postpaid

一ドラモンド傳 柏井園氏著 卅六年一月十五日發兌 一部定價大抵四十五錢

一學生の誘惑 ジョン、アール、モット氏演說 石川林四郎氏通譯 英和對照 一部定價八錢郵稅二部迄二錢

一青年の感惑 ジョン、アール、モット氏演說 石川林四郎氏通譯 一部定價十錢 郵稅二錢

一個人傳道 ジョン、アール、モット氏著 北原鉞夫氏譯 一部定價五錢 郵稅五部迄二錢

一ゴルドン將軍傳 德富健次郎氏著 一部定價卅錢 郵稅四錢

一リビングストン傳 有本武郎氏 森本原吉氏共著 一部定價郵稅共五十錢

一基督信徒の特徵 內村鑑三氏著 一部定價卅二錢 郵稅六錢

一基督教の要性 ジョーヂ、チ、ラッド氏講演 一部(郵稅五部マデ二錢)金三錢

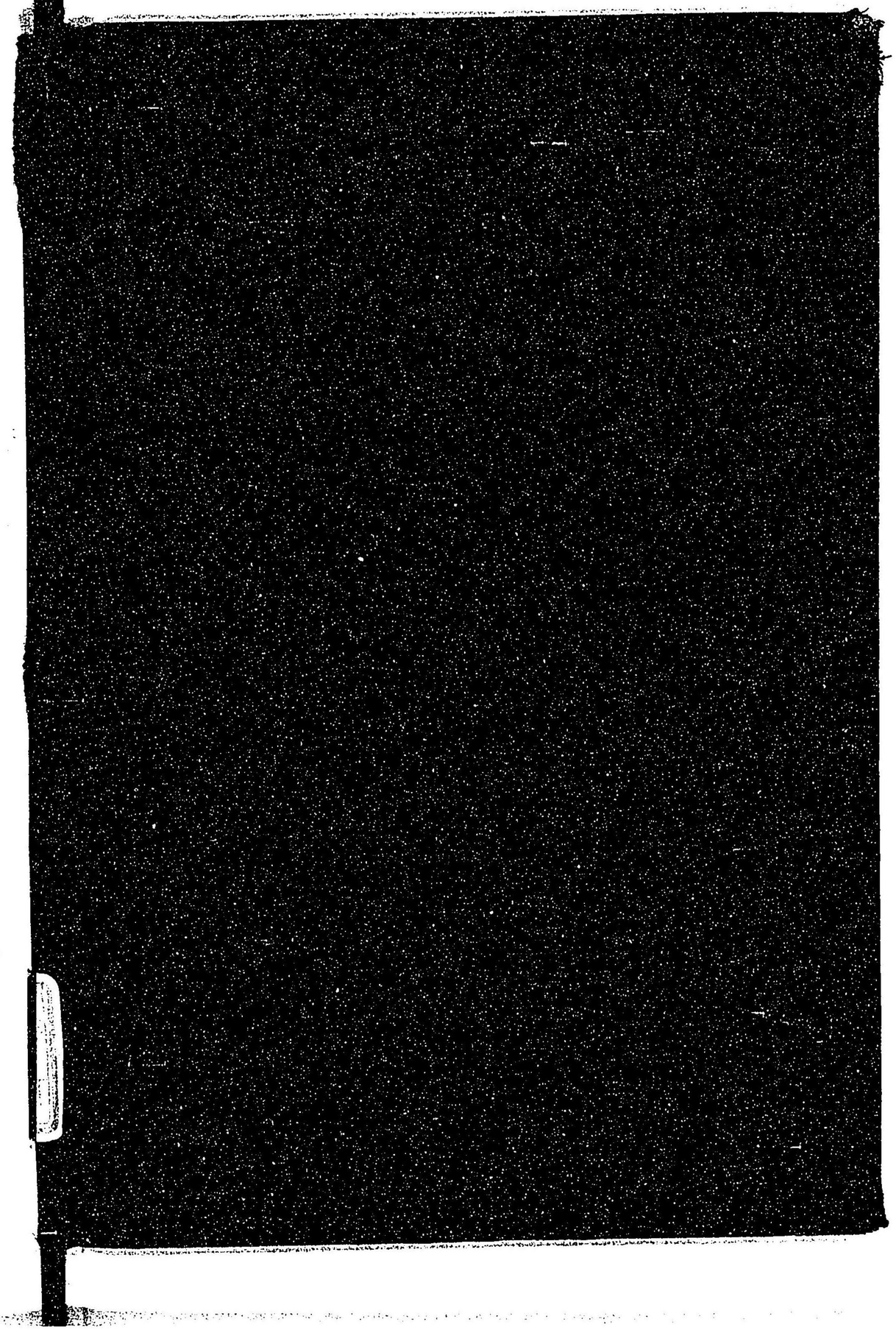
一聖書研究の要綱 フヰシヤー氏新著 一部(郵稅五部マデ二錢)和文金四錢

一使徒保羅傳 日本學生基督教青年會同盟 一部定價十錢郵稅二錢(五部郵稅六錢)

學生同盟機關雜誌每月一回發兌 一年金五拾錢郵券代用不苦

東京市神田區美土代町三丁目三番地
青年會出版部

95
1



020570-000-8

95-1

基督之事実

シムプソン/著

M35

ABI-0384